

思いをカタチに アール・ブリュット の世界へようこそ

みなさんは、アール・ブリュットという言葉を知っていますか。

アール(Art)は「芸術」、ブリュット(Brut)は「加工されていない、生のままの」という意味のフランス語で、芸術を語る概念の一つです。今号では、アートディレクターの小林瑞恵さんにその魅力をナビゲートしてもらいます。

小林瑞恵さん プロフィール

(福)愛成会(中野5丁目)の副理事長兼アートディレクター。国内外でアール・ブリュットの発信や展覧会の企画・運営を行うキュレーターとして活躍。通算20年以上の中野区在住歴がある中野ファンでもある



▲アトリエ pangaea (5ページで紹介)の参加者の作品

アール・ブリュットとは?

1945年に、フランスの画家ジャン・デュビュッフェ氏が提唱した概念で、生の芸術とも呼ばれ、専門的な美術教育を受けていない人が、独自の手法で生み出す芸術作品を指します。

例えばフランスの郵便配達員が道端の石を拾い集め33年かけて作った宮殿「シュヴァルの理想宮」(右の写真)。建築知識のない人が自らの理想を具現化するため生涯をかけて制作しました。このように、湧き上がる感情などを基に日常の中で生まれる芸術が、アール・ブリュットです。



▲フランスの重要建造物に指定されています

ここが魅力

私は、スイスのローザンヌでアール・ブリュット作品を見た時、自分が今まで見たことのないような表現に心を打たれました。一般的な芸術作品とは違い、誰かに認められたいという考えがなく、感性や衝動のままに生み出された作品の数々。そこには、その人の考え方や育った環境といった人生史が色濃く反映されています。例えば、戦争の多い地域で生み出された作品には、その人独自の感性で捉えられた戦争が描写されていることも。作品を通して世界の奥行きや人間の多様性が見られる、そんなところが魅力です。



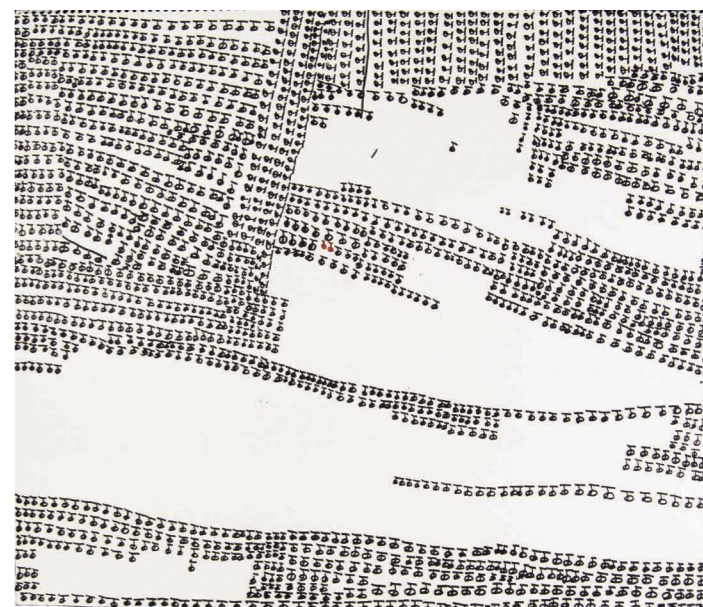
おすすめの作品を紹介します

無題が多いのも、見せるための作品ではないことの表れなんです

01 無題

国府田良子 作 1949年生まれ 中野区在住

水性ペンで画用紙にひらがなの「お」の点がない文字を繰り返し書き(描き)、特有の不思議な配列のリズムで形成された作品です。彼女の名字の「こおだ」の「お」からきているそう。聞くこと、話すことが不自由な彼女は、言葉以外の方法で自身を表現する術(自由な空間)を見つけ、描くことに熱中しています。



制作年: 1990年代 H 459 x L 531mm 撮影: 大西暢夫

02 無題

澤田真一 作 1982年生まれ 滋賀県在住



制作年: 2010年~2011年
H 460 x L 190 x D 240mm
撮影: 高田真澄

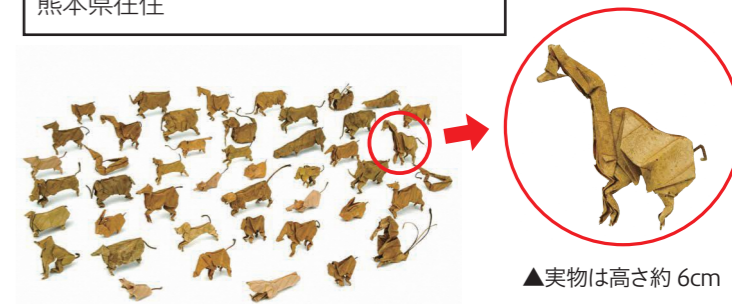
トゲトゲに創られた陶器で、トカゲやたぬき、鬼などさまざまな生き物や妖怪などを連想させます。

彼の作品は2013年に世界で最も伝統と権威のある現代美術の祭典「第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」に出展されました。日本のアール・ブリュットを代表する創り手は、人間の果てしない豊かな創造力を伝えてくれます。

☆作品注釈内のHは高さ、Lは長さ、Dは奥行きを表す

03 折り葉の動物たち

渡邊義紘 作 1989年生まれ 熊本県在住



▲実物は高さ約6cm

制作年: 2003年~2017年ごろ H 18-65 x L 12-75 x D 13-91mm 撮影: 高石巧

クヌギの落ち葉から折りだされた高さ2~6cmほどのさまざまな動物。身近な素材を使い、頭の中で折り方を考えながら創作します。2歳の時に自閉症と診断され、10歳で創作活動を始めた彼は、作品を通して多くの人と交流を図ることが大好き。その発想と創造性は、世界でも類を見ません。

これらの作品は、国内最大規模のアール・ブリュット展「NAKANO 街中まるごと美術館!」に展示したものの。この展示会の成り立ちなどについては、次のページへ。

